

◇ 1月の天文暦 ◇

日 時	記 事
4 9	金星 留
6 2	木星 月の 2° 南通過
6 4	小寒 (太陽黄経 285°)
7 14	望
8 19	月 最近
14 5	下弦
17 23	土用 (太陽黄経 297°)
20 21	大寒 (太陽黄経 300°)
22 1	朔
24 4	月 最遠
26 18	金星 内合
30 5	上弦

十 千 十 二 支

近頃来年(1966年)はひのえうまだから…というよ
うなことをよくきく。これは十千十二支(えと)と呼ば
れるもので、その起りは古く中国の殷の時代とされて
いる。十千とは甲・乙・丙・丁・戊・己・庚・辛・壬・
癸、十二支とは子・丑・寅・卯・辰・巳・午・未・申・
酉・戌・亥のことで、これを組み合わせるとその最小公
倍数 60 を周期とする記号ができる。これらはそれぞれ
10進, 12進, 60進の特徴を生かして、年月日を数えたり、
時刻や方位を示すのに使われたが、今でも天文用語

東京における日出入および南中(中央標準時)

I月	夜明	日出	方位	南中	高度	日入	日暮
日	時分	時分	時分	時分	時分	時分	時分
1	6 15	6 51	-28.1	11 44	31.3	16 38	17 14
11	6 16	6 51	-26.6	11 49	32.5	16 47	17 22
21	6 14	6 48	-24.3	11 52	34.6	16 56	17 31
31	6 9	6 42	-21.1	11 54	36.8	17 7	17 41

の中に子午線、正午などがなごりをとどめている。

その後、十千は五行説とむすびついて、甲乙は木、丙
丁は火、戊己は土、庚辛は金、壬癸は水の兄弟とされ、
きのえ、きのと、ひのえ、ひのと、つちのえ、つちのと、
かのえ、かのと、みずのえ、みずのとと呼ばれた。一方
十二支は動物と関係づけられ、ね(ねずみ)、うし、と
ら、う(うさぎ)、たつ、み(へび)、うま、ひつじ、さ
る、とり、いぬ、み(いのしし)とよばれ、十千とあわ
せてきのえねに始まりみずのとみに終わるえとが完成し
た。時代が下るとこれはさらに運勢論とむすびつき、特
に何の年に生まれたかを問題にするようになった。60才
を還暦というのも、生まれた年のえとが再びめぐって
くるのを意味している。

十千十二支の表

1. 甲子 2. 乙丑 3. 丙寅 4. 丁卯 5. 戊辰
6. 己巳 7. 庚午 8. 辛未 9. 壬申 10. 癸酉
11. 甲戌 12. 乙亥 13. 丙子 14. 丁丑 15. 戊寅
16. 己卯 17. 庚辰 18. 辛巳 19. 壬午 20. 癸未
21. 甲申 22. 乙酉 23. 丙戌 24. 丁亥 25. 戊子
26. 己丑 27. 庚寅 28. 辛卯 29. 壬辰 30. 癸巳
31. 甲午 32. 乙未 33. 丙申 34. 丁酉 35. 戊戌
36. 己亥 37. 庚子 38. 辛丑 39. 壬寅 40. 癸卯
41. 甲辰 42. 乙巳 43. 丙午 44. 丁未 45. 戊申
46. 己酉 47. 庚戌 48. 辛亥 49. 壬子 50. 癸丑
51. 甲寅 52. 乙卯 53. 丙辰 54. 丁巳 55. 戊午
56. 己未 57. 庚申 58. 辛酉 59. 壬戌 60. 癸亥

(本年のこの欄の担当は、東大理学部の中田氏。な
お各月の天文暦、日出入表、日月惑星運行図の担当は、
東京天文台の原寿男氏)

各地の日出入補正值(東京の値に加える)

(左側は日出, 右側は日入に対する値)

分	分	分	分	分	分
鹿児島 +27	+46	鳥 取 +22	+22	仙 台 +2	-11
福 岡 +32	+42	大 阪 +15	+19	青 森 +10	-16
広 島 +26	+32	名古屋 +10	+12	札 幌 +14	-27
高 知 +20	+29	新 潟 +9	-3	根 室 -2	-45

◇ 1月の日月惑星運行図

